



**実行委あいさつ 原発事故を前に、今、学問と未来  
を考える（緊急ティーチイン@和光大学 震災・脱原  
発を考える） --（第2回ティーチイン 学問と未来：  
震災から見える学問と生のかたち）**

著者	堂前 雅史
雑誌名	東西南北：和光大学総合文化研究所年報
巻	2012
ページ	244-247
発行年	2012-03-19
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00001286/">http://id.nii.ac.jp/1073/00001286/</a>

## 原発事故を前に、今、学問と未来を考える

堂前雅史 所員／現代人間学部教授

緊急ティーチン@和光大学「震災・脱原発を考える」の第2回「学問と未来」の司会を務めさせていただきます堂前です。よろしくお願いいたします。

最初に実行委員の一員として、こういう場を設けた趣旨を申し上げます。ご承知の通り3月11日に起きた地震・津波に続く福島第一原発の事故は、我々にとって大変な衝撃でした。三つの炉が揃ってメルトダウンしたことは驚きでしたし、この時期に知らされると、驚きを越して呆れてしまい、我々としてはどう受け止めていいのかという状態です。この社会はここまで危なっかしいものの上に乗っていたのを思い知らされたということでは、前々から「危険だ」を主張していた我々にとっても、実は「想定外」だったということを反省させられてしまいます。

今回の事故で特に印象的なことは、メディアや専門家の言うことがあてにならない、信用できないと思われたところです。その中で、「御用学者」という言葉をしばしば耳にするようになりました。それは、科学者として語るべき真理や事実を隠ぺいして、産業側や権力側の都合の良いことばかりを言っている、少し欲に目がくらんだ学者というものを想定しているのだと思います。

そういう人もいるかもしれませんが、今回の事態を、そういう特定個人の人格や心掛けといったものに帰してしまっているのでしょうか。むしろ、まじめで良心的な科学者が、「御用学者」として機能してしまう構造が我々の社会、あるいは科学技術の中で、もっと言えば、それを支えている学問の中でもあるのではないか。そうだとしたら、科学のあり方の根幹に関わることですから、これは大変なことです。そういう視点から考えたいと思っています。

科学や科学技術を含めた学問の場について、この20年間ぐらいはどうであったかを振り返ってみましょう。1986年にチェルノブイリ事故が起こった時に、今回のように我々の科学技術文明が立脚しているものの危うさが露呈したはずなのですが、その後の日本の大学はどういうふうに動いていったかということ、産学共同に向けて大きく舵を切りました。

私は1988年に生物学の助手になったのですが、その頃は大学教員が大企業から研究補助金を受ける時の基準は「条件なし」というものでした。つまり、企業側から条件を出されていない、見返りを求められていないということが条件でした。大企業からお金をもらって研究するということに、形式的にしろ、研究の自由が

制限されかねないというやましさのようなものがどこかつきまとう空気が大学の中にありました。

ところが1990年代から、「大学は社会に貢献しなくてはいけない。大学の研究者はもっと積極的に企業から資金を得て、企業も得するような共同研究をなささい」という方向になっていきます。それで、産業界から多額の研究支援を受ける教員は「やましさ」を拭い去って、むしろお手本のような存在に変わっていきます。

さらにそのあとの2000年代にかけて、新自由主義的な風潮の高まりの中で、大学で重んじられる教育として、企業に就職する就業力、あるいは企業社会で生き残っていける能力を養うキャリア教育にもっと力を入れましょうという方向へ向かっていきます。また少子化時代に向かって、入学者確保のために、世間の評判を芳しくしなくてはならないということで、学生が不祥事を起こさないよう学生管理に力を入れるようになってきました。

以上が、チェルノブイリ以後フクシマまでの、日本中の大学の光景になってきたというのが私の印象です。メディアはこうした状況を、「大学が象牙の塔に閉じこもらないで、社会に開かれ、社会のニーズに応えるようになった」と評価しました。もちろん、産業界も社会の一部である以上、そうしたセクターとの連携が有意義であるケースも多々ありましょう。しかしながら、チェルノブイリ以後フクシマまでの日本の大学の学問のありようは、我々の社会が科学技術の危うい面の上に乗っているというリスクを見つけ出す力、あるいは批判する力を大学から急速に奪ってしまって、衰えさせてしまったのではないのでしょうか。

こうした学問というのは、そもそもいったい何のためにあるのかを考える際に、いのちや生活というものをキーワードに、この場では考えていきたいと思います。私たちのいのちや生活を守るための学問だったはずが、その最先端の産物である原子力発電所が、私たちと子どもたちと労働者のいのち、あるいは人々の生活をあっけなく打ちひしぐという現実を目前にして、学問というものについて、もう一度考えることが必要なのではないかということが、この第2回目のテーマです。

本日はそういうテーマですので、「今すぐ、ここで原子力発電所を止めるための直接の行動のきっかけにしたい」というように思っていらっしゃる方、あるいは「原発事故の真相をここで暴こう」というふうに考えていらっしゃる方には、少し迂遠な話に思われると思います。

しかし、これは避けては通れないことです。科学とは学問とは何かという議論をしていなかったから、危機的な事態になっていたのではないのでしょうか。そういう議論を避けて、お座なりにしていると、今回の事故が収束したあとに、また同じような事故が起こるかも知れません。次は原子力発電所事故ではなくて、化学物質汚染かも知れませんし、バイオハザードかも知れません。我々の社会が乗っている科学、ないしは科学以外の学問というものについて、しっかりとここで

考えていかねばなりません。

例えば自然科学という知的活動のあり方を考えてみます。自然科学というものは、複雑な自然現象を調査し、その背景となる一般性の高い法則を見いだす活動として認識されています。複雑で、そのままでは理解しがたい自然現象を理解しやすくするためには、特別な条件を作って現象を単純化させます。自由落下を理解したければ、照明の調整された風のない室内で重い球を落下させた方が、風のある屋外で不定形の物体が回転しながら落下するのを観察するのよりも分かりやすいでしょう。生物現象を理解したければ、生体丸ごとのままであるよりも、器官を取り出したり、細胞を培養したり、遺伝子を解析した方が、普遍性が高く単純化された知見が得られるでしょう。「分かる」という行為は、こうしたノイズを無視する手続きが必要となります。コントロールされた単純で普遍性の高いモデルを用いて理解することで、我々は自然を理解し、管理することにある程度成功して、現代文明を形作ってきました。

しかし実際の自然や生命は、我々が「分かった」とおりのものなのでしょうか。

今、話題になっている放射線の線量の基準も、「これから下は安全」という線引きができるものなのでしょうか。知られているように、放射線被曝には閾値がなく、どんなに低線量でも浴びた総量に比例して障害が出る確率が上がるというモデルが一般的に想定されています。さらに低線量の放射線というものについては、不明な点が多く研究結果も少ない状況です。こういう断言が困難な状況にありながら、「安全基準」が求められるというのは、我々の社会制度や文化は、科学技術によって客観性のある正確な予測を提供し、確実にコントロールするという前提に立っているのではないのでしょうか。距離や線量を基準に、「この人の避難は合理的」「この人が避難したのは自分の勝手」という線引きができるという考えは、そういう確実性への信頼の上に立っているのではないのでしょうか。科学者が自然やいのちを「分かっている」という、こうした信頼の仕方と科学と付き合っていて良いのだろうか、ということが今突きつけられているようにも思います。

今回の事故をきっかけに、我々の社会は、自然科学を含めた学問とどう付き合っていかなければならないのかを根底的に問い直していかなければならないと思います。第2回は、そうしたことを考えるための話題提供者として、お二人をお招きしました。二人とも元々自然科学の世界にいらして、現在、それぞれ違うお立場から社会問題に取り組んでいる方です。

一方は最首悟さんです。ご存知の通り最首さんは、動物学者として東京大学助手になった翌年の68年から東京大学全共闘運動で活躍なさり、70年代に水俣病調査団の団長として水俣病問題に取り組まれ、大学とは何か、学問とは何かを問うていくという活動を積み重ね、近年は学問をメタレベルで問う学問として学問をひっくり返して「問学」というものを提唱していらっしゃいます。2007年まで和

光大学で教員をなさっていらっしゃいました。もう一方の向井宏一郎さんです。向井さんは理論物理学の研究をなさっていらっしゃいましたが、同時に野宿者支援活動で活躍していらっしゃいます。和光大学では「ソフトパスエネルギー」の講義を担当していらっしゃいます。

最首さんは以前より、科学や科学技術のもたらす問題について、単なる反科学的な批判にとどまるのではなく、人間という生き物がなぜ科学という知的活動をしてしまうのか、しないではいられないのかについて哲学的な視点から論じています。その中で人間という存在に、科学のメスが入ることについて、生物学と哲学の両方を踏まえた視点として「いのち論」という視点から論じていらっしゃいます。最首さんの「いのち」という語には若干の補足をさせていただきます。最首さんは、一般に言われる命（あるいは生命）を「生命」と「いのち」という二つの不可分な要素からなるモデルとして捉えているように思います。「生命」の方は生物学や自然科学が解明する対象として分析される対象になりうる側面です。遺伝子や酵素反応系として還元主義的に分析することができる、つまり「分かる」ことができる対象と言えましょう。一方で「いのち」は、そうした分析の対象になりえない、生命の残余の部分ともいえる面を指しているのだと理解しています。この部分は分析的知で「分かる」ものではないし、科学的分析を加えて分かったつもりになってはいけません。分析的知は「生命」だけでなく、「いのち」までも数字にし、線を引いてしまいます。しかし、現代社会に生きる我々は分析的知に頼ることによってしか、この世界を理解できませんし、生活の基盤も築けません。科学技術文明の暴走の結果とも思われる原子力発電所事故にあっても、向井さんの指摘のように、科学技術は今回も安全／危険等の線を、いのちのあり方の上に引こうとしています。事故への対策を、私たちは科学的数値に依拠し、科学的数値をもとに判断を迫られています。これは50年前の水俣病の構造を思い出させます。科学技術が引き起こした水俣病は、「科学的根拠」の不足を理由に規制されず、被害が拡大され、「科学的根拠」の名の下に患者は認定されず、被害者は科学技術から何重もの打撃を受けたとも言えるでしょう。今回は、どうなるのでしょうか。それを考えるためには、私たちの生活と科学の関係を根本までさかのぼって考えなくてはならないと思います。

今日はそれぞれの立場から、学問、いのち、生活ということについて、お話いただき、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

[どうまえ まさし]